

修辞機能と脱文脈化による書籍の文体的特徴の分析

－ 専門度に焦点をあてて－

田中 弥生 (国立国語研究所 研究系) *

柏野和佳子 (国立国語研究所 研究系)

加藤 祥 (目白大学 外国語学部)

Analysis of Writing Styles of Books by Examining Rhetorical Functions and Decontextualization: Focus on Reading Difficulty

Yayoi TANAKA (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Wakako KASHINO (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Sachi KATO (Mejiro University)

要旨

本発表は、人手により文体的な観点の印象評定が付与されたテキストの文体情報について、修辞機能と脱文脈度の観点によって検討する研究の一環である。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の図書館サブコーパスの文体分類指標(柏野 2013)が付与されたサンプルのうち、専門度の異なる40サンプルを分析対象として、修辞機能分析の分類法を用いて修辞機能と脱文脈度を特定した。その結果、全体的に脱文脈度の高い修辞機能が用いられていることが確認され、また、半数以上のサンプルで専門家向きとされた書籍と一般向きとされた書籍のそれぞれで特徴的と見られる修辞機能があること、NDCによって特徴が見られることが明らかになった。

1. はじめに

文体についての研究は、品詞の分布、語彙、語種、読点など、さまざまな観点から行われている(金 2009)。柏野(2013)は文体を分類するための指標として、専門度、客観度、硬度、くだけ度、語りかけ性度の分類指標を提案し、柏野(2015)にて現代日本語書き言葉均衡コーパス(The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: 以下,BCCWJ)の図書館サブコーパス(LB)のサンプルに、人手による印象評定から文体情報を付与している。テキストが専門家向きか一般向きか、客観的か主観的か、硬いか軟らかいか、などと感じるのは、どのような言語的特徴と関わりがあるのだろうか。柏野(2015)によって付与された文体情報について、浅原ほか(2014)は語彙の観点から文体との対応を確認している。また、馬場(2019)は図書館サブコーパスに含まれる語(語彙素)の文体差を数値化し、品詞別特徴、ご種別特徴の傾向を示すとともに、内省判断との相関を明らかにしている。文章の印象を決める要因を明ら

* yayoi@ninja.ac.jp

かにすることは、作文や文章表現指導などに寄与できると考えられる。

本発表は、人手により文体的な観点の印象評定が付与されたテキストの文体情報について、修辞機能と脱文脈度の観点によって検討する研究の一環である。修辞機能と脱文脈度を測るために、修辞機能分析の分類法(田中 2022)を用いる。修辞は、技巧的なものと捉えられることがあるが、本研究では「修辞機能」を「話し手書き手が発信する際に、言及する対象である事態や事物や人物等を捉え表現する様態を分類し概念化したもの」と定義する。また、文脈や脱文脈化という言葉は、研究分野によって異なる用いられ方をしているが、本研究では、脱文脈度を「発話がコミュニケーションの場「いま・ここ・わたし」にどの程度依存しているか」の程度を表す概念とする。例えば初詣について言及するときに、「この神社にはたくさん人が来ているね。」と述べるのと、「私は去年初詣で甘酒を飲んだ。」と述べるのと、「初詣は日本の伝統行事だ。」のように述べるのとでは、修辞機能と脱文脈度が異なる。これまで、修辞機能と脱文脈度の観点について、児童作文、家族の談話、職場の談話、高齢者グループの談話など(田中ほか 2021, 佐尾ほか 2023, 田中・小磯 2019, 田中 2017, 田中ほか 2022, 2023)の分析から、目的やテーマ、話題内容、状況によって、用いられる修辞機能が異なり、脱文脈度が推移することなどが明らかになっている。BCCWJのデータに付与された文体情報について、修辞機能と脱文脈度の観点によって検討したパイロットスタディ(田中ほか 2023)では、書籍の特徴を修辞機能の観点から捉えることの可能性がうかがえた。また、田中ほか(2024)では、文体情報のうちの客観度に焦点をあてたパイロットスタディを行い、客観的とされたサンプルでは主観的とされたサンプルより脱文脈度の高い修辞機能の占める割合が高いこと、主観的なサンプルでは客観的なサンプルより多様な修辞機能が用いられている可能性が見られた。いずれもサンプルが4件と少ないパイロットスタディであったが、本発表では、専門度が異なる書籍サンプルの中で、整った条件で使用できる40サンプルを分析対象として、専門度の違いと修辞機能及び脱文脈度との関連を確認する。以下、第2節で分析データと分析方法について述べ、第3節で分析結果を示し、第4節で考察を述べ、第5節でまとめを述べる。

2. 分析データと分析方法

2.1 分析データ

本発表の分析対象データは、BCCWJの図書館サブコーパスに収録され、柏野(2015)による文体情報が付与されている書籍サンプルのうちの40件である。この40件は、以下の手順で選定した。

1. 専門度が「専門家向き」あるいは「一般向き」に分類されているサンプルを抽出する⁽¹⁾。
2. 専門度以外の条件を揃えるため、客観度、硬度、くだけ度、語りかけ性がそれぞれの中で一致しているものを抽出し、NDC⁽²⁾ごとに集計する(表1参照)。
3. NDCによる影響を考慮できるようにするため、表1より専門家向きと一般向きのサンプルが10件以上あるNDC3(社会科学)とNDC5(技術、工学)を分析データとして

⁽¹⁾ 専門度の指標は、専門家向き、やや専門的な一般向き、一般向き、中高生向き、小学生・幼児向きの5種である。

⁽²⁾ 図書館で利用されている日本十進分類法。

用いることを決め、10件を超える場合には、乱数によって順位をつけ、NDC3の「専門家向き」、NDC3の「一般向き」、NDC5の「専門家向き」、NDC5の「一般向き」それぞれから10件の合計40件を選定する。

表1 専門度の異なるサンプルのNDC別件数

専門度	印象評定				N D C										
	客観度	硬度	くだけ度	語りかけ性	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
専門家向き	とても客観的	とても硬い	くだけていない	特に語りかけ性はない	1	4	1	22	9	10	5	2	2	0	56
一般向き	とても客観的	とても硬い	くだけていない	特に語りかけ性はない	4	9	29	43	5	11	4	5	1	7	118
				計	5	13	30	65	14	21	9	7	3	7	174

2.2 分析方法

修辞機能分析は、Rhetorical Unit Analysis(Cloran 1994, 1999)を日本語に適用した修辞ユニット分析(佐野 2010, 佐野・小磯 2011)を元に、日本語文法の枠組みで修正を加えた分類法である(田中 2022)。分析手順は、次のとおりである。

1. 分析単位(メッセージ)に分割し、分析対象を特定する。
2. 分析対象のメッセージについて発話機能を分類する。
3. 発話機能が「命題」のメッセージについて、時間要素と空間要素を分類する。
4. 発話機能・時間要素・空間要素の組み合わせから、修辞機能と脱文脈度を特定する。

以下に手順の概要を示す。

2.2.1 分析単位の分割と分析対象の特定

分析単位であるメッセージは概ね節に相当するが、連体修飾節は独立したメッセージとして扱わない。メッセージは「定型句類」(相槌、挨拶、定型句、節の形でないものなど)、「主節」(単文、及び主節)、「並列」(従属度の低い従属節)、「従属」(従属度の高い従属節)、「引用」(“と思う”などで引用されている部分)に分類する。

2.2.2 発話機能・時間要素・空間要素

メッセージの種類が「主節」「並列」「引用」に分類されたメッセージについて、発話機能・時間要素・空間要素を分類する。表2に示したように、これらの組み合わせから修辞機能と脱文脈指数が特定される。【行動】[01]がもっとも文脈に依存した表現で、【一般化】[14]がもっとも脱文脈度の高い表現である⁽³⁾。

表2 発話機能・時間要素・空間要素からの修辞機能と脱文脈指数の特定

定義	↑ 高空間的距離のレベルも低						一般化 14
状況外	報告 09	状況外 回想 10	予測 11	推量 12	説明 13		
状況内		状況内 回想 03	状況内 予想 05	状況内 推測 06	観測 08		
参加	行動 01	実況 02	計画 04		自己記述 07		
空間要素	← 低 時間的距離のレベル → 高						
時間要素		現在	過去	未来 意志的	未来 非意志的	仮定	習慣 ・恒久
発話機能	提言	命題					

⁽³⁾ 以下、本文中では修辞機能を【】で、脱文脈指数を[]で示す。

発話機能は「提言」か「命題」に分類する。「提言」は、品物・行為の交換に関する提供・命令で、基本的には同じ時空に存在する相手に働きかけたり、会話者同士の行為にかかわる発話内容が該当し、【行動】[01]と特定される。例えば、同じ時空にいる相手への「スプーンを取って」のような行為や物を要求する場合である。「命題」は、情報を交換する陳述・質問で、「私はひまわりが大好き」「このひまわりは大きいね」「ひまわりはキク科の植物だ」などが該当する。発話機能が「命題」のメッセージについて、時間要素と空間要素を認定する。目の前の相手にグラスを渡して「ほら、お水を飲んで」と言うのはその場で行為を要求しているため「提言」に分類するが、「熱中症予防のためにはお水を飲んで」と伝えるのは、その場での行為を要求しているのではなく、熱中症予防のために水分補給が大切だという情報を提供していると考え「命題」とする。書籍サンプルの分析では、著者と読者の存在する時空を紙面と考え分類することができ、「お水を飲んで」のように行為を要求するメッセージは、例えば引用文や小説などの会話文以外では、現れることは少ないと考えられる。

時間要素は、話者のいる時間「いま」を基準として、メッセージで表現されている出来事がいつ起こったかを示す要素である。基本的にテンスや時間を表す副詞などによって表現され、「習慣・恒久」⁽⁴⁾「現在」「過去」「未来意志的」「未来非意志的」「假定」に分類する。「太郎が写真を撮っている」は「現在」、「去年のひまわりは大きかった」は「過去」、「来週、ひまわり畑に行こう」は「未来意志的」、「私はひまわりが大好き」は嗜好であるため「習慣・恒久」、「ひまわりはキク科の植物だ」は恒久的と判断し「習慣・恒久」に分類する。書籍サンプルで基準となる「話者のいる時間」については、著者が執筆した時間と考えることができる。例えば、「今、ここにひまわりが咲いている」という文が書籍に書いてある場合、読者が読んでいる時間を基準にすると「過去」と考えることになるが、あくまでも著者が執筆した時間を基準とし、さらに、「今」という副詞と「ある」という現在を示す表現から、「現在」に分類する。

空間要素は、話者のいる場所「ここ・わたし」を基準として、メッセージの中心となる語句との空間的距離を示す要素で、述部の主体や主語、主題から判断し、「参加」「状況内」「状況外」「定義」に分類する。「私」「あなた」が主語であれば「参加」、「太郎が写真を撮っている」は太郎が話者と同じ時空にいると考えられるので「状況内」⁽⁵⁾、「去年のひまわりは大きかった」「ひまわりは日本中で楽しめる」のひまわりは話者のいる時空には存在していないと考えられるので「状況外」、「ひまわりはキク科の植物だ」はひまわり一般について述べているので「定義」に分類する。

2.2.3 修辭機能と脱文脈化度の特定

表2を参照し、発話機能、時間要素、空間要素の組み合わせから、修辭機能と脱文脈度を特定する。表3と表4にアノテーション例を示す。本研究の分析対象データは書籍サンプルであり、章や節の見出しなども含まれているが、これらの見出しは節の形式でないことが多く、分類対象外としている。表4のaは見出しだが、便宜上、発話機能欄に（対象外）と示している。また、表3のc、f、h、表4のb、d、g、s、wの発話機能欄などが空欄のものは、従属度の高

(4) 「習慣・恒久」には、属性、嗜好、評価も含む。

(5) 「状況内」には、話者の身体や所有物、思想、また、その談話の中で話題になっている事柄も該当すると考える。

い従属節のため、単独で分類は行わないメッセージである。

表3 LBj3.00155 (「専門家向き」に分類されたサンプル。NDC3)

	メッセージ	発話機能	時間要素	空間要素	修辞機能 [脱文脈化指数]
a	日本社会の高齢化は種々の重要な公的政策上の問題を提起している。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
b	労働への参加、社会保障費用の調達、高齢者の住宅問題、それに高齢者医療が特に重要である。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
c	人口の高齢化はこれからの数十年間にアメリカでも、日本ほどではないにしても、				
d	急速に進むだろうし、	命題	未来非意志的	状況外	予測 [11]
e	同じ争点が重要な関心事となっている。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
f	国連が出版した『千九百九十年の世界人口見通し』によると、アメリカでは六十五歳以上の人口の比率は、二千二十年に十七. 三%に、二千二十五年には十九. 六%に達すると	命題	未来非意志的	状況外	予測 [11]
g	予想されている。				
h	高齢者の現状と主要な傾向を研究することで、	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
i	将来どうなるのかを 理解し、				
j	これらの争点に取り組む公的政策の立案に役立てることを編者は期待している。	命題	習慣・恒久	参加	自己記述 [07]

表4 LBs5.00068 (「一般向き」に分類されたサンプル。NDC5)

	メッセージ	発話機能	時間要素	空間要素	修辞機能 [脱文脈化指数]
a	現場の技術が支える日本の技術構造	(対象外)			
b	これまでの論理を踏まえて、				
c	日本機械産業の技術構造について考えてみたい。	命題	現在	参加	実況 [02]
d	これまでの日本の技術構造は、三角形でいうと、				
e	高く幅の広い、各技術のバランスがとれた、富士山のような三角形であった。	命題	過去	状況外	状況外回想 [10]
f	ゆえに、高度経済成長をリードする存在になりえた。	命題	過去	状況外	状況外回想 [10]
g	貿易摩擦が大きな問題になるほどに				
h	驚異的な輸出競争力をみせることができたのだ。(中略)	命題	過去	状況外	状況外回想 [10]
r	土台となる基盤技術がきちんと存在したため、	命題	過去	状況外	状況外回想 [10]
s	ード産業が、船から自動車、そしてエレクトロニクスへとかわっていても				
t	十分に対応することができた。	命題	過去	状況外	状況外回想 [10]
u	とくに、東京都大田区や大阪府東大阪市などは基盤技術のメッカと呼ばれている。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
v	大田区には一時期九千もの中小企業がひしめきあっていた。	命題	過去	状況外	状況外回想 [10]
w	こういった地域では特定の加工分野に特化した中小企業が数多く集まり、				
x	産業集積を形成している。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]
y	産業集積とは、地理的に狭い空間に多くの企業が集中していることである。	命題	習慣・恒久	定義	一般化 [14]
z	そこでは多くの企業が分業と競争を行う。	命題	習慣・恒久	状況外	説明 [13]

2.3 修辞機能の出現頻度と割合

サンプルごとの修辞機能の出現頻度と割合を表5と図1に示す⁽⁶⁾。全体的に脱文脈度の高い修辞機能が用いられ、中でも【説明】[13]と【状況内回想】[10]が多く出現している。図1では、専門家向きで【説明】[13] (水色)、一般向きでは【説明】[13]に加えて【状況外回想】[10] (黄土色)が多く使用され、特に専門家向きのNDC5 (技術、工学)で【説明】[13]が多く、一般向きのNDC3 (社会科学)で【状況外回想】[10]の割合が多くなっていることがわかる。一方で、いくつかのサンプルでは独自の特徴を示していることもうかがえる。例えば、専

⁽⁶⁾ アノテーションは2名の作業者によって行われた。信頼性検討のためカッパ係数を求めたところ、 $k=.718$ で、かなり一致していることが確認された。

専門家向けのNDC3の中で、【説明】[13]より【状況外回想】[10]が多いサンプルがあり、一般向けのNDC5の中で【説明】[13]が多いサンプル、【状況外回想】[10]が極めて少ないサンプル、【一般化】[14]（オレンジ色）が極めて多いサンプルなどがある。

表5 サンプルごとの修辞機能の出現頻度

SampleID	01 行動	02 実況	03 状況内 回想	04 計画	05 状況内 予想	06 状況内 推測	07 自己 記述	08 観測	09 報告	10 状況外 回想	11 予測	12 推量	13 説明	14 一般化
LBb3_00055	0	0	0	0	0	0	7	0	0	11	1	0	140	4
LBd3_00071	0	1	0	0	0	0	2	0	28	216	1	0	48	1
LBd3_00079	0	2	0	0	0	0	5	0	2	1	0	0	84	12
N LBh3_00102	0	1	0	1	0	0	2	1	24	47	14	0	79	1
D LBi3_00126	0	2	2	1	1	0	7	12	17	75	5	1	106	0
C LBj3_00081	0	0	0	0	0	0	3	0	4	76	7	0	21	0
専 3 LBj3_00155	0	0	0	0	0	0	5	4	1	9	20	1	134	0
LBm3_00036	0	0	0	0	0	0	2	0	0	4	0	0	8	1
門 LBm3_00048	0	0	0	0	0	0	0	0	2	19	0	2	62	8
LBm3_00111	0	1	0	0	0	0	2	0	1	1	0	0	88	0
家 LBc5_00002	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	1	0	23	0
向 LBc5_00012	0	0	0	0	0	0	6	1	0	0	0	0	17	0
LBc5_00028	0	0	2	1	0	0	6	2	2	25	1	1	139	10
N LBj5_00001	0	1	8	0	0	0	5	2	1	18	0	1	64	1
D LBj5_00022	0	3	0	0	0	0	1	12	1	5	0	0	38	3
C LBk5_00020	0	3	0	4	0	0	0	0	0	8	0	0	54	3
5 LBk5_00046	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32	2
LBi5_00047	0	4	8	0	0	0	6	2	0	22	4	0	165	0
LBc5_00049	0	3	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	79	14
LBs5_00009	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33	0
LBc3_00049	0	0	3	0	0	0	3	1	7	34	1	1	40	0
LBd3_00017	0	1	3	0	0	0	0	0	2	110	0	0	60	0
LBi3_00131	0	0	0	0	0	0	1	0	0	22	0	0	20	1
N LBm3_00072	0	0	0	4	0	0	0	0	1	101	0	0	18	0
D LBq3_00002	0	1	0	0	0	0	2	0	12	43	1	0	48	2
C LBq3_00072	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17	16	0	25	1
一 3 LBr3_00016	0	0	0	0	0	0	0	1	1	118	1	0	42	1
LBs3_00052	0	1	3	3	1	0	6	10	5	64	4	1	214	0
LBs3_00159	0	0	0	0	0	0	2	0	6	70	1	2	26	1
向 LBt3_00107	0	0	1	0	0	0	0	0	0	16	0	1	25	0
LBd5_00020	0	1	2	0	0	0	4	1	0	0	0	0	49	0
LBh5_00007	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	72	46
LBh5_00041	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	18	0
N LBj5_00014	0	4	7	1	2	0	5	0	1	98	1	0	19	0
D LBc5_00007	0	0	0	0	0	0	0	0	1	79	0	0	4	0
C LBc5_00064	0	1	3	0	1	0	8	6	3	24	4	2	60	3
5 LBq5_00012	0	3	0	0	0	0	1	0	0	3	1	0	140	1
LBq5_00069	0	1	2	0	0	0	7	0	0	19	0	0	51	0
LBr5_00013	0	0	0	0	0	0	0	0	0	60	0	0	0	0
LBs5_00068	2	2	0	0	0	0	1	0	2	23	1	0	103	2

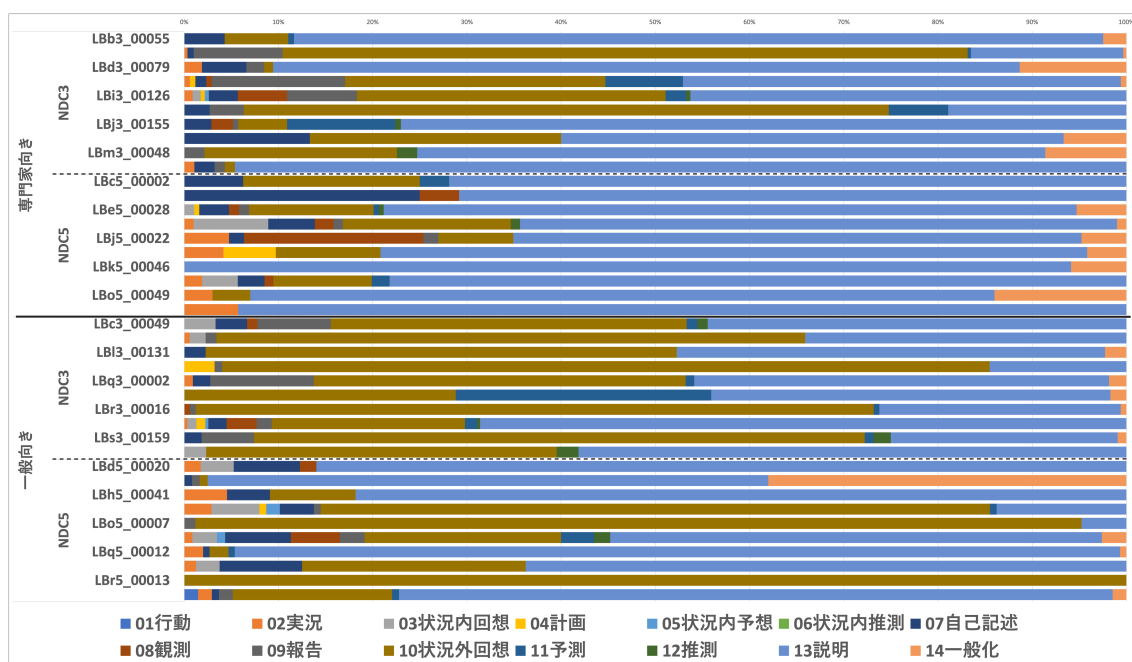


図1 サンプルごとの修辞機能の出現割合

また、サンプルと修辞機能との対応関係を調べるために、対応分析を行った⁽⁷⁾。分析には R の ca 関数を用いた。まず 40 サンプルを対象にした結果を図 2 に示す。

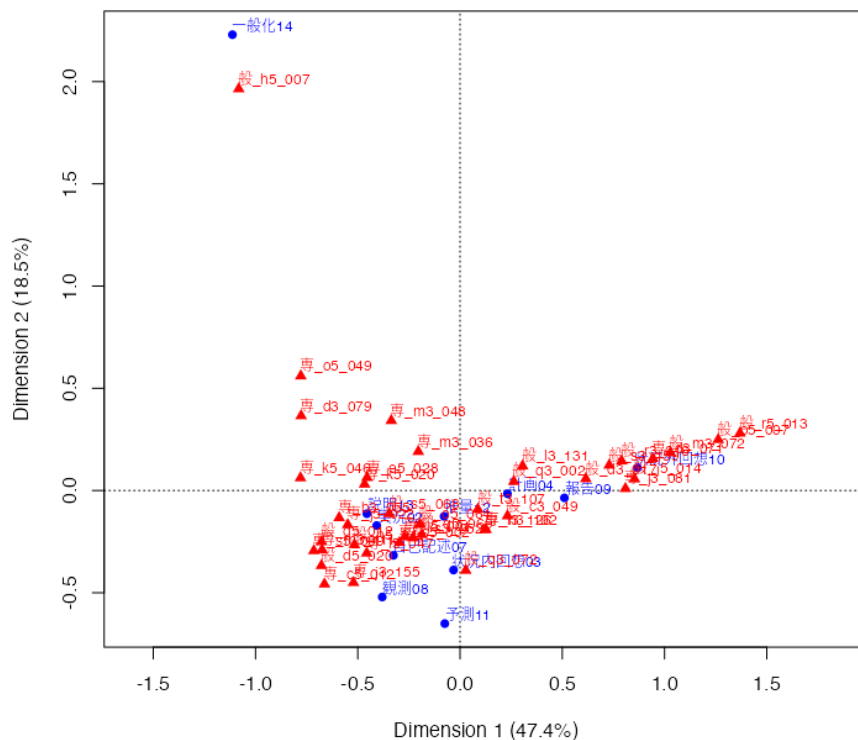


図 2 サンプルと修辞機能の対応分析結果

図 2⁽⁸⁾では、Dimension1 の寄与率が 47.4% で左側に専門家向きが多く、【一般化】 [14]、【説明】 [13]、【自己記述】 [07]、【観測】 [08]、【実況】 [02] などと共に位置し、右側に一般向きが【状況内回想】 [10]、【報告】 [09]、【計画】 [04] とともに位置している。また、Dimension2 の寄与率は 18.5% で、般_h5_007 (LBh5_00007 (一般向き)) が【一般化】 [14] と極めて関連が高いことが示されている。

次に、NDC 別の対応分析の結果を確認する。図 3 は、NDC3 の 20 サンプルの対応分析の結果である。Dimension1 の寄与率は 56.3% であるが、左側に主に専門家向きが【一般化】 [14]、【実況】 [02]、【推量】 [12]、【自己記述】 [07]、【説明】 [13]、【観測】 [08]、【予測】 [11] とともに位置し、右側に主に一般向きが【状況外回想】 [10]、【報告】 [09] とともに位置している。図 4 は、NDC5 の 20 サンプルの結果で、Dimension1 の寄与率は 54.9% であるが、【状況外回想】 [10] とともに一般向きに分類された 3 サンプルが右に位置し、左側及び中央には、専門家向きすべてと他の一般向きが【説明】 [13]、【観測】 [8]、【実況】 [02] など他の修辞機能とともに位置し

(7) 出現頻度が 10 件未満の修辞機能は除外した。

(8) 対応分析の作図結果の見やすさのため、各ファイル名の冒頭に専門家向きに「専」、一般向きに「般」を付与し、10 桁のファイル名の内、すべてに共通している「LB」と「000」を削除して、6 桁に短縮して示した。例えば、専門度が専門家向きと分類されている「LB05_00049」は、「般_h5_049」としている。

ている。また、全体の結果（図2）でも確認した般_h5_007は【一般化】[14]とともに左端に位置し、Dimension2の寄与率21.8%でこの【一般化】[14]が影響していることが考えられる。

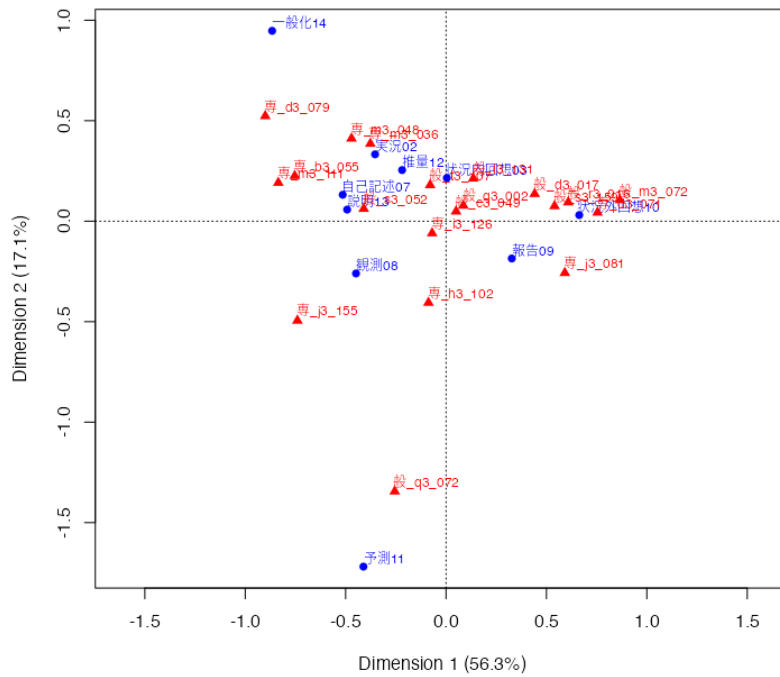


図3 NDC3 サンプルと修辞機能の対応分析結果

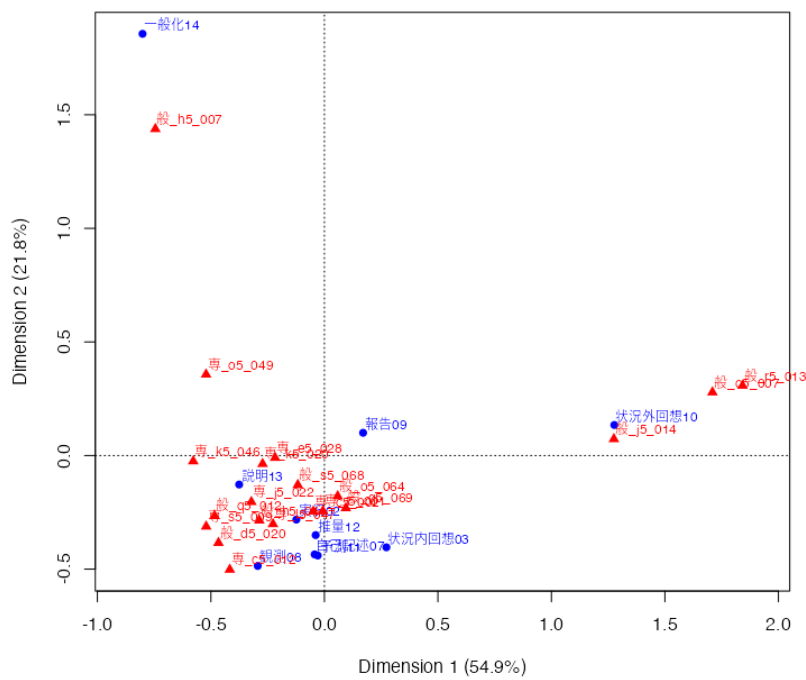


図4 NDC5 サンプルと修辞機能の対応分析結果

3. 考察

以上の分析結果から、専門家向きと付与されたサンプルでは【説明】 [13] が多く使用され、一般向きとされたサンプルでは【説明】 [13] に加えて【状況外回想】 [10] が使用されていることが明らかになり、概ねの傾向としては認められるであろう。また、NDC を合わせて検討すると、専門家向きの NDC5 は【説明】 [13] との親和性が高いが、NDC3 は【状況外回想】 [10] の割合が高いサンプルもあること、一般向きの NDC3 は【説明】 [13] と【状況外回想】 [10] ともに用いられる傾向があるのに対し、NDC5 は【状況外回想】 [10] が少ないかほぼ用いられないサンプルもあるというように、NDC によって異なる特徴が見られることがうかがえた。

表 3 に示した「日本の高齢化は～提起している。」「同じ争点が重要な関心事となっている。」のような【説明】 [13] は、専門家向きと評価され、表 4 で示された「これまでの日本の技術構造は～富士山のような三角形であった。」や「大田区には～中小企業がひしめきあっていた。」のような過去の事実を述べる表現（【状況外回想】 [10]）がある程度含まれると、一般向きと評価される可能性があることがうかがえた。このことは、事実の描写が含まれると専門性が薄れることを示唆するものと考えられる。例えば、表 3 の LBJ3_00155 は、NDC3 で専門家向きとされたサンプルだが、「日本社会の高齢化は種々の重要な公的政策上の問題を提起している。」（【説明】 [13]）を「日本社会の高齢化は種々の重要な公的政策上の問題を提起した。」（【状況外回想】 [10]）、「労働への参加、社会保障費用の調達、高齢者の住宅問題、それに高齢者医療が特に重要である。」（【説明】 [13]）を「労働への参加、社会保障費用の調達、高齢者の住宅問題、それに高齢者医療が特に重要であった。」（【状況外回想】 [10]）のように表現すると、専門性の評価が下がる可能性があるということである。

表 5 と図 1 の出現頻度と割合の様子から、【一般化】 [14] と【説明】 [13] という脱文脈度の高い修辞機能が多用されている場合、専門家向きと判断される可能性は低くないと思われるが、図 2 と図 4 で他のサンプルから離れて【一般化】 [14] と近くに位置した般_h5_007 (LBh5_00007) は、表 6 に冒頭部分を示すように、【一般化】 [14] と【説明】 [13] が多く使用されているにもかかわらず一般向けと評価されており、このような修辞機能の出現割合が異なる傾向を示しているサンプルについて、修辞機能以外の影響を検討することも必要となるだろう。

表 6 LBJ3_00007（「一般向き」に分類されたサンプル）

メッセージ	修辞機能 [脱文脈化指数]
5 砂糖	(対象外)
砂糖の製法と日本の砂糖事情	(対象外)
砂糖は甘藷（砂糖キビ）または甜菜（砂糖ダイコン）の糖液から甘み成分であるショ糖を取り出した天然の甘味料で、	一般化 [14]
塩と並ぶ世界的な調味料である。	一般化 [14]
日本では北海道で甜菜、九州、沖縄、四国で甘藷を栽培しているが、	説明 [13]
自給率は三十%に過ぎず、	説明 [13]
残りはキューバ、タイなどからの輸入甘藷で賄っている。	説明 [13]
これはいったん精製した原料糖で購入するが、	説明 [13]
不純物が多いので	説明 [13]
水に溶かして精製し直している。	説明 [13]
砂糖の精製法は以下の通り。	報告 [09]
まず甘藷・甜菜の糖液から不純物を除く。	説明 [13]

4. まとめと今後の課題

本発表は、人手により文体的な観点の印象評定が付与されたテキストの文体情報について、修辞機能と脱文脈度の観点によって検討する研究の一環で、BCCWJの図書館コーパスのサンプルに付与された文体情報(柏野 2015)のうち、専門度に着目して、修辞機能分析の分類法(田中 2022)を用いて修辞機能と脱文脈度を検討した。専門度以外の文体情報(客観度、硬度、くだけ度、語りかけ性度)を統一し、専門度が「専門家向き」と「一般向き」のいずれかに分類されたNDC3とNDC5のサンプルについて修辞機能と脱文脈化指数を確認したところ、専門家向きは【説明】[13]、一般向きは【説明】[13]に加えて【状況外回想】[10]の使用が、概ねの傾向として認められた。また、この傾向は、NDCによって特徴があることもうかがえた。いくつかのサンプルでは、異なる傾向が見られたため、修辞機能以外の要因をあわせて検討することを今後の課題としたい。

謝 辞

本研究はJSPS科研費JP23K00569によるものです。

文 献

- C. Cloran (1994). "Rhetorical units and decontextualisation: An enquiry into some relations of context, meaning and grammar." Unpublished doctoral dissertation, University of Nottingham Nottingham.
- C. Cloran (1999). "Contexts for learning." Frances C (Ed.), *Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Processes*. London: Continuum International Publishing. pp. 31–65.
- 浅原正幸・加藤祥・立花幸子・柏野和佳子 (2014). 「文体指標と語彙の対応分析」 第6回コーパス日本語学ワークショップ予稿集, pp. 11–20.
- 柏野和佳子 (2013). 「〈共同研究プロジェクト紹介〉萌芽・発掘型: テキストの多様性を捉える分類指標の策定 書籍サンプルの文体を分類する」 国語研プロジェクトレビュー, NINJAL Project Review, 4:1, pp. 43–53.
- 柏野和佳子 (2015). 『『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』(2015年公開第1版)』. <https://doi.org/10.15084/00003109>
- 金明哲 (2009). 「計量文献学」 計量国語学会(編) 『計量国語学事典』 朝倉書店 pp. 238–252.
- 佐尾ちとせ・宮城信・田中弥生 (2023). 「修辞機能分析を活用した作文指導」 日本語習熟論研究:1, pp. 140–158.
- 佐野大樹 (2010). 『日本語における修辞ユニット分析の方法と手順 ver.0.1.1: 選択体系機能言語理論(システムック理論)における談話分析(修辞機能編)』, <https://researchmap.jp/kotonoha/>資料公開/.
- 佐野大樹・小磯花絵 (2011). 「現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証-

- 「書き言葉らしさ 話し言葉らしさ」と脱文脈化言語 文脈化言語の関係-」 機能言語学研究, 6, pp. 59-81.
- 田中弥生 (2017). 「相談における談話構造：修辞機能と脱文脈化の観点からの分析」 言語資源活用ワークショップ発表論文集, 1, pp. 69-78.
- 田中弥生 (2022). 「修辞機能と脱文脈化の観点からの日本語談話分析」 博士論文（未公刊）, 東京大学大学院総合文化研究科.
- 田中弥生・柏野和佳子・加藤祥 (2023). 「書籍の文体と修辞機能の分析のパイロットスタディ」 言語資源ワークショップ発表論文集 1 巻, pp. 142-150. 国立国語研究所.
- 田中弥生・柏野和佳子・加藤祥 (2024). 「書籍の文体情報と脱文脈度の関連 一客観度との対応のパイロットスタディー」 社会言語科学会第 48 回研究大会発表論文集, pp. 367-370.
- 田中弥生・小磯花絵 (2019). 「家庭での幼児の発話の修辞機能：脱文脈化の観点からの検討」 言語資源活用ワークショップ発表論文集:4, pp. 106-118.
- 田中弥生・小磯花絵・大武美保子 (2022). 「脱文脈化の観点から見た共想法に基づく高齢者談話の分析」 国立国語研究所論集:22, pp. 137-155.
- 田中弥生・小磯花絵・大武美保子 (2023). 「共想法による話し言葉・書き言葉における修辞機能の特徴 - テーマとの関係に着目して -」 言語処理学会第 29 回年次大会発表論文集, pp. 1356-1360.
- 田中弥生・佐尾ちとせ・宮城信 (2021). 「児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討」 言語処理学会 第 27 回年次大会 発表論文集, pp. 750-755.
- 馬場俊臣 (2019). 「BCCWJ 文体情報の各文体指標の特徴語：『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』を用いて」 北海道教育大学紀要. 人文科学・社会科学編, 69, pp. 1-14.